九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

心中涙の玉の井（一）

小島, 吉雄
九州帝國大學法文學部國文學研究室助教授

https://doi.org/10.15017/10585

出版情報：九大國文學. 2, pp.87-100, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

講說　心中涙の玉の井（一）

小島吉雄

例言

一、心中涙の玉井は元祿十六年夏豐竹座旗上げに上場せられた豐竹若太夫の淨瑠璃正本である。作者は紀海音との言ひ傳へが古くからあるが、確證はない。わたくしは、紀海音の世話淨瑠璃との關係に於て本曲はどういふ地位にあるかを知りたいと思つた。此の講說はさういふ、わたくしの欲求を滿足せしめるための準備的操作である。

一、元來本曲の研究は今學期當教室に於ける學生諸君の演習課題として課せられたものである。學生諸君は數人の協同作業の下に本曲を色んな角度から考察して相當の收穫をあげた筈である。わたくしの此の講說は、それとは別箇にわたくし自身の考へに從つて、一つの試みを試みるのである。由來、德川時代の文學作品の解釋には、なほ未開拓の世界が多い。わたくしの念願は、わたくしの此の貧しい一鍬に對する先輩諸氏の示教を得てわたくし自身を豐かにしたいといふ一點にのみかかつてゐる。

一、心中涙の玉井の正本は今日では稀覯に屬する。而も、その活字に翻刻せられたものも數種を數ふるに過ぎない。わたくしは此の解釋の傍ら、忠實な本文複刻の役目をも果さうと思ふ。使用の原本は伊藤小三郎先生舊藏の十行十六

丁本である。原書寫眞版は三浦周行氏編する堺市史本編中に收錄せられてゐる。

一、原本は淨瑠璃本の常として假名書や宛字が多くて一般讀者には甚だ難讀なものである。本稿では、右文右傍に六號活字を以て夫々適當な漢字を、且つ假名遣の誤れるものは歷史的假名遣をしるして讀者の便宜を計つた。なほ、懸詞になつてゐる言葉には括弧を附して區別しておいた。句讀點はすべて原本のままである。振假名のうち、平假名の分は原本にあるものであり、片假名の分は讀者の便を思つたわたくしのさかしらである。

一、淨瑠璃院本は、勿論、人形劇の臺本として製作せられたものである。しかし、淨瑠璃といふものの特質を見ると き、そこには、劇的要素と叙事詩的要素とが同時的に存在してゐる。淨瑠璃作品が時代の降るとともに段々演劇的になつて行つたことは明かだが、如何に劇的要素の百分率が多くなつても、その人物描寫に物語的方法を捨てず、また平氣で作者の主觀を表面に露呈することを敢へてしてゐる事は、われわれをして普通の演劇脚本に對するのと異なる態度を淨瑠璃に對して執らしめる。即ちわたくしの考へでは、淨瑠璃といふものは、操的舞臺効果に即して考察すると共にまた曾て坪內逍遙博士が論及せられたやうに、これを一種の劇的叙事詩としてその詞章効果を併せ檢討し、はじめてその價値が闡明せらるべきである。蓋し、かくの如き意味に於て、此の詞章の解釋的研究も亦その存在理由をもつであらうと信ずる。

一、淨瑠璃文の現代語譯は殆ど不可能事といふべきである。然し、わたくしは、ただ初學の讀者の爲を慮つて、大躰の文意を辿つた口語譯を併揭することにした。その不手際な出來榮えについては慚愧の外ない。

おはつ住吉參り道行

次第 おしゑのみちもあきつ國。〳〵神のみやゐにまいらんと。フシげに世の中は。戀のあき。たれによすがのふみ月や十六七のおみなめし。露をふくみしおもぶりの。ただつくろはずぼんぢやりと。かみのゆひぶりぐちならず。ホオクリびらり。ぼうしのはづれよりにほやかなりしまゆのいろ。まろめし戀はこれやらん。フシかさかたむけて。おちこちの。人にやしのぶすがたにて。ともをもぐせずつれもなく。フシオクリやうやう〳〵たどりきたのはしフシなみ木の松に。風そよぐ。はつともすそのうらみせて。しよていねぶかしいかゞとてかかゑるおびをしなをしつ。身ぶりなをすもなまめかし。ゆんでに立

敎へ道秋(明)　神宮居參　女郎花　含面振　縁文　髮結振愚痴　端帽子　匂　眉色　圓　緒　是　笠傾　遠近　忍　姿　伴　具　連　無　漸　迦北(來)　橋　並　裳裾　裏見　直　振　艶　弓手　立

しせきたうはいともかしこきじんくわんの。しるしなりけるいろしらぬ。野ぢはさびしやせめてさて
たはれ小てうのとびつれて。歌のぼりつをりつまるくなり。さもいそがはしく見へつるはりんきかち
はかきたしと。人にとはれす。たゞひとり。心づかいも身の上をすこしなぐさむよすが也。
西はうなばらびやう〳〵と。とをき山々きやうとくも。風にまかせてはしり舟。そちは伊豫ぢかさぬ
きぢかッシあゝままならぬ。此せかい。わがたましひはうか〳〵と。人めのしげき小ざさ原露
わけ。もせぬうきくろうくじらよるべの浦成共。思ふ人どちくらすならほんにいきたる佛様おあみ
だ様もお心の。とをらせ給ふ物ならば。とにかくはやく我々がねがひを。かなへたび給へと。おがむ
心もいたづらや安立町のかうじん様。ふうふの中をよきやうにとかたむく軒に夕顔の。
りさびしさにのきにひやうたんつらせたりや。おりしも風がふいてあなたのかたへからころひよ。
こなたへからころひよ。からころ〳〵〳〵ひよつとひやうたんのつらせたるは何よりもつておもし

ろいきしの姫松。ほの見へて。あはぬ昔とあい見て後と。思ふ思ひは思ふより思ひの外の思ひ也。まだおひ様の四つぢぶん。見あぐる顔のまばゆきに扇かざして。見はらかしあゝよい景とほゝ笑みて。つぐみかしどり色鳥の。さしあひなしにはねぶすま。歌鳥の中にもひよくの鳥は〳〵。おのれ斗がつまもち顔に。はね打そろへて。〳〵露のしぐれにはをひたし。おのがまゝなる其ふぜい。ナウあつ鳥とながめすていづくしるべはなけれ共しばしが程も。住吉と。聞に昔のあいおひに。千代にかはらぬ松の色と。もしらがなることぶきは。誠にめで度御神のかたき。ちかいやかたそぎの石の鳥井のお前なる。心すずしき水茶やの。ゑんのはしゐに腰かけてしばらくやすらひ〳〵給ひける。

（意　譯）

頃は文月、戀の秋、露もしたゝるばかりの美顔の白粉氣なくぼんぢやりと初々しく、髪の結ひぶりもすつきりと水際だつた十六七の町娘が、びらり帽子のはしから魅惑的な眉をのぞかせながら、笠傾けてあたりの人目を忍ぶかの

樣子で、伴をもつれず、道連れもなく、ただひとり堺の大道筋を北に、ここ北の橋にさしかかる。敎法明けき日の本の住吉のみ社に詣でようといふのである。折しも橋詰の松並木にそよぐ風が此の少女の裳裾をぱつと飜した。崩れた身なりに娘心のつい氣が咎めて、これでは人の見る目もいかがと抱帶を仕直し身繕ひをする。それも亦なまめかしい。道の左手に立つてゐる石塔は、あの羽振りのよかつた大野道犬の供養塔だが、殺風景なこのあたりの野路の淋しさ。ただ、眼の前を胡蝶が互にもつれあつて上になり下になり丸くなりして飛んでゆく。少女は胸に憂き戀を秘めての道行なんだが、歩きながら、此の蝶々のとびゆく姿を恪氣喧嘩か痴話狂ひかなどと心に想像してゐると少しは身の憂さ晴しになるのであつた。街道から西のかなたは、ただ渺々たる青海原、その向うに浮んでゐる山々の影も杳として物淋しく、風のまにまに走りゆく帆船の、その行く方は伊豫か讃岐か、たどきも知らぬ物わびしさである。娘は、住吉へと歩みを運ばせながら、「ああ、思へば儘ならぬ此の世の中、わが心はうかうかと人目のしげい戀の山に踏み入つて而も叶はぬ戀故の此の憂き苦勞。よし、鯨寄る邊鄙の浦べでも、好いたどうしが一緒に暮すなら、それこそ、ほんに此の世ながらの佛といふものだが、お阿彌陀樣も粹を辨へてござらつしやるものなら、とにかく早う我々の戀を叶へて下され」と、徒心のともすれば、また佛を念ずる心にもなるのであつた。道はやがて安立町に入つたが、傍らの荒神の祠にも「夫婦の中をよい樣に」と祈りつつ行けば、町筋の軒のはに吊された瓢箪が、風が吹けばあちらへカラコロヒヨこちらへカラコロヒヨとゆれ動くその風情の面白さ、さうかうするうちに、岸の姫松の面白い姿が東南はるかに仄見えはじめた。仄見えるといへば、仄見たばかりで未だ戀を語らなかつた昔に比すれば、逢うてののちの戀心は一入切實なものだ。日ざしは、まだ十時頃でもあらう。見あげる空のまばゆさ

に、扇をかざして見晴し、ああよい景色とばかり微笑んで恍惚としてゐる折から、鶺や樫鳥や色々の渡り鳥が誰れ憚らず羽うちかはして樂しげな姿で飛んでゆく。流行歌に「鳥の中でも比翼の鳥はおのれ一人が夫持ち顔に」とある夫婦仲よい鳥の姿も輕い嫉み心で思ひ描かれる。さて、聲かしましく群れゆくは鶺子鳥である。それを輕く眺めすてて、少しゆく程に、間もなく住吉に辿り着いた。不案内の土地ながら、暫し住み好しといふその名を聞けば、あの相生の松の故事が思ひ出されるが、千代に變らぬ松の綠になぞらへて、夫婦共白髮を祝ふ言の葉は誠に目出たい、堅い住吉明神の御誓約ではある。その住吉の石の鳥居の前の凉しげな水茶屋の緣端に腰うちかけて、この娘は、暫く足を休めたことであつた。

（語　釋）

○敎への道もあつき國――謠曲「龍田」の次第に「敎への道も秋津國〳〵數ある法を納めん」とある文章から來てゐる。「あきつ國」の「あき」は、懸詞になつてゐて、道あきらかと秋との兩意をかねてゐる。秋つ國といふ言ひ方は特殊な言ひ方だが、矢張り秋津洲と同意と考へてよからう。敎法明かなる日の本の國といふことである。

○神の宮居に參らん――謠曲「鵜祭」の次第に「御影曇らで君守る〳〵神の宮居に參らん」とある。本文では、ここは女主人公お初が住吉神社に參詣するところだから、かういつたので、神の宮居は勿論住吉神社を指すのである。ここのところは謠曲の次第に擬して作られてゐる。元來、能樂の次第といふのは、上例にもあるとほり、同一の七五の句を二度くり返して更に七五の句をつづけて諷ふもので、シテ、ワキ、ツレなどの役者の出に伴ふことが多い。さういふ場合には、次第のあとに道行の出てくるのを普通としてゐる。此の淨瑠璃も、主人公お初の登場するところで而もお初の住吉への道行といふのだから、謠曲風に次第を以てはじめたのである。淨瑠璃といふものは、もともと謠曲の影響を受けて發達したもので、かくの如く謠曲の俤の忍ばれるところが極めて多い。しかし謠曲を淨瑠璃に利用する場合には之れを世話に崩して用ふるのが例だから、こゝも「參らんと」と「と」の一字を以て、謠曲次第の堅苦しさを巧みに行草化して次に續けたので

ある。「敎の道も秋津國神の宮居に參らむと」は、のちの「ともをも具せず連れもなくやうやう辿り」に、文意がつづくのである。

○誰れによすがの文月や――「誰によすがの」は「ふみ」にかゝる序詞的修辭で、字義は、「誰れにゆかりの手紙か」といふのであるが、此の場合、文月の「ふみ」は、手紙の意味と七月の意味と、兩樣をかけたものである。文全體から言ふと、秋七月といふ時をここに提示しようとするだけのことであつて、戀の秋といふも、誰れによすがのといふも、ただ文章のあやにすぎない。上に「戀の秋」と言つたから、戀の語の緣で、「誰によすがのふみ」と受けたので、その「ふみ」を懸詞にして、「ふみ月」とつづけたわけである。此の處、戀の思を藏して宮詣でする艷麗の少女を描くのであるから、自然、かういふ戀の秋とか誰れによすがのふみとかといふが如き艷かしい修飾をもつてしたのである。「や」は提示の助辭、「荒海や佐渡によこたふ天の川」などの「や」に同じ。

○十六七の女郎花――女郎花はお初をたとへたのである。なほ、女の子といふに同じ。

○露を含みし面振りのただ繕はずぼんぢやりと――お初の顏容の描寫である。露を含んだ面ぶりとは、俗にいふ露もしたたるばかりの容色である。ただ繕はずは、ただ生地のままで手入れをせずとの意、とりたてゝ化粧らしい化粧もしてゐないのを言つたのである。「ぼんぢやり」は、肉附のいい初々しい艷姿に對する形容であつて、おぼこく無邪氣な豐頰の持主にいふ。ぼんぢやり型は當時の娘風美人の一つの典型であつた。

○髮の結振り愚痴ならず――髮の結ひぶりが野暮でない、氣がきいてゐる。即ち、すつきり水際だつた髮の結ひぶりを言ふのである。下關猫魔達といふ淨瑠璃にも、「髮のゆひぶりぐちならず」といふ句がある。元來愚痴といふ言葉は字義どほり馬鹿といふ意味だが、その用ゐられる範圍が廣くて、譬へば、紀海音の「椀久末松山」に「淋しいとて宵から寢では、あつたら目がぐちになる」といふやうにも使はれたもので、かくて、髮のゆひぶりなどにも用ゐられたわけだらう。

○びらり幞子――紫縮緬でつくつた置手拭やうのもの。笠の下に被り、額ぎはまでひらひらと垂れさせる。

○匂やかなりし眉の色――にほやかなる眉の色といふに同じ。「し」は、ここでは過去の意をもつてゐない。單に語意を强める役目をしてゐるのみである。近松の一心五戒魂に「みづからは大切なりし願ありて淸水の觀音へ日毎に參り候が」また、西鶴の好色二代男に、「殘して何の役に立たざりし切れを惜しみ」などとあるのも皆「し」に過去の意がない。これは此の時代に屢あらはれる特別の語法と考ふべきである。にほやかなる眉の色といふは、艷美したたるばかりの眉の意。

○まろめし戀はこれやらん――眉に對する筆者の感想である。まろめるは、わが手中のものとしてしまふことである。「と

れ」とは眉の色をさす。即ち、男の心を捉へたのも此の眉の艶麗な魅力からであらうといふのである。

○人にや忍ぶ姿にて――人目をはばかる忍び姿で、といふ意味。字義どほりに譯せば、人目を忍ぶとでもいふやうな姿で。

「をちこちの」は、「人」を修飾する。

○北の橋――泉州堺市は東北南の三方はその外側に幅數間の溝渠がめぐらされてゐる。北の橋はその北側の溝渠に架せられた橋で大道筋（堺市の南北貫通の中心道路）から住吉、大阪への往還路にあたつてゐる。「北の橋」の「きた」に「來た」の意が含められてゐる。

（註）黒木勘藏氏の名著全集本淨瑠璃名作集には、「北の端」なる漢字が當てられてゐる。北の端は、堺の北端、現今の北半町邊の總稱であつて、（友人橋本元二郎君の調査して呉れられたところによると、現今では、溝渠よりも北にあたる並松町――舊堺市外――のあたりをも北の端と呼んでゐるさうである。）それでも意味は通じないことはないが、わたくしはやはりそれよりも、北橋と考へた方が、並木の松に風そよぎ、の文意によく添ひはしないかと思ふのである。北の橋の北詰からは松並木街道である。

○並木の松――當時は北の橋を北にわたると松並木の街道であつた。今日の並松町（たゝまつ）にあたる。

○しよてい訝し――身なりが變だ。風采がとり亂れてゐて、あやしげだ。

○いかがとて――これでは如何かとて。

○抱へる帶――抱へ帶をいふ。抱帶とは、着物の腰からげをする扱帶のことである。

○ゆん手に立ちし石塔――堺、並松町の西側即ち北橋北詰の西側に大野道犬供養塔がある。元和元年大野道犬が此處で火刑に處せられたのをその追善の爲建てられた石碑である。此の石碑は今日では他に移されて此處にない。（堺市史）堺から住吉の方へ向ふ時には此の石塔は左手にあたるわけだ。

○いとも長き人寰の標なりける――人寰は獵人界といふに同じ。此の場合は、此の娑婆にあつて高貴の地位を占めてゐた人の標識である、といふ位の意味であらう。「ける」は「こゝでは、文の結びと見るべきである。係りの助詞がなくても結びが連躰形である場合は江戸時代の俗文學には屢見るところである。

○色しらぬ野路――大野道犬供養碑のあつた北之橋北詰、街道の西側のあたりには、當時、處刑場があつた。所謂北仕置場といはるゝものがそれである。其の境域東西五間、南北十八間、現在は並松町のうちに屬してゐる。色しらぬは色氣のない、或は不風流な野路の意。處刑場のあるためにかう言つたのである。

○人に問はれず――胡蝶二羽飛びつれてゐるは悠氣をしてゐるのか痴話狂ひなのか、これを誰れかに聞きたいと思ふけれどまさか人に問はれもせず、といふ意。

○心づかひも身の上を――人にも問はれず、唯一人そのやうな事に心を勞してゐるのも少しは身のうさばらしになるといふのである。おはつが戀の物思を內に藏してゐるが故にこの文章が生きるのである。

○きやうとくも――氣疎くもである。こゝでは、ものさびしく氣遠き氣持をいふ。

○そちは――そちらの方は。

○あゝ儘ならぬ此世界――風にまかせてはしり舟と言つたのを受けて、續けられた句である。自由にならぬ此の世やと歎くのである。

○人目のしげき小笹原露分けもせぬ愛き苦勞――人目がしげくして戀の逢ふ瀨のならぬ愛苦勞を言つたのである。小笹の露分けるを戀の道に入つてゆくに譬へたのには、新勅撰集戀一の部に「戀の山しげきをざさの露分けて入りそむるよりぬるゝ袖かな」といふやうなのがあり、露分けるといふ言葉に戀の逢ふ瀨を寓意したものには、源氏若紫に「ねは見ねど哀れとぞ思ふ武藏野の露分け侘ぶる草のゆかりを」といふやうなのを擧げることが出來よう。そこで、此の文章も此れらの先例をうけて、逢ふ瀨のまゝならぬを寓したものと解せられる「しげき」と言つたから「小笹原」とうけ、「小笹」から「露分く」と緣語でつゞけたのである。源氏物語花宴の卷にも、「何れぞと露の宿りをわかむまにこ笹が原に風もこそ吹け」といふ歌がある。上述と同例の修辭である。

○鯨よるべの浦――鯨よるあたりの浦といふのは、邊鄙の海濱を意味する。

○思ふ人どち――愛人同志である。

○ほんに生きたる佛樣――本當に生佛だといふ意。こゝでは、なほ、此の世ながらの極樂などといふのと同樣の意味合であらうと思ふ。

○お阿彌陀樣もお心のとほらせ給ふものならば――近松の蟬丸に、「佛もお氣のとほらめと膝にもたれて」とあるのと同意だと思はれる。佛も粹をきかす心をもつてゐるならば、我らの戀を叶へさせてたまはれと拜むのである。「氣がとほる」といふのは粹をきかすことである。これを「心がとほる」といふ言ひ方は珍しい。けれども、「とほる」といふだけでも氣がとほるの意に用ひるのであるから、（たとへば、「扨とほつたり、とほつたり、」（近松作世繼曾我第四）、或は、粹をわきまへたる者をとほり者といふが如く）こゝのところも粹をきかす意味にとつてよろしからう。恐らく七五調にする爲め特に「おこころの」と言つたのであらうと思ふ。ここは前に「生きたる佛樣」とのべたので、それを受けて「おあみだ樣」とつづけたのであるが、攝陽群談によれば安立町に阿彌陀寺といふのがあり、本尊は聖德太子御作彌陀立像だとあるから、或は此の寺の本尊に祈誓をかける意味を含んだものかも知れない。しかし、それほど迄には考へなくとも玆のところの意味はよく通じるのである。

○安立町（アンリフ）――今の大和川と住吉との間の街道筋にある町名、但し、大和川は元祿十七年の開鑿であるから、此の涙の玉の井の作られた頃には無かつた。さて、お初は北之橋を渡り松並木街道を辿つて安立町にさしかかつたわけである。

○荒神様――安立町の町はづれ、霰松原にある。祭神は奥津彦命並ニ奥津姫命、竈神である。

○傾く軒に夕顔の――夕顔の「ゆふ」が「言ふ」の懸詞になつてゐる。傾く軒に言ふといふのを語呂でそのあたりの實景にとりなして夕顔と受けたのだらうと思ふ。延享四年に出板せられた自笑樂日記二之卷に安立町の町並を描いて「兩側を見るにさまざまの唐辛をならべたる店もあり、名物の煙管店、結習ひの筆屋。簾にかけたる瓢のぶらぶらしたる渡世」とのべ、ここに瓢箪見世を點出してゐる。これは元祿よりは大分後の時代のものだし、且つこの記事だけで斷定するは早計だが、或は此の安立町には瓢箪店があつて、涙の玉井のここのところの文章はその寫實に基づいてゐるのではないかと想像せられる。自笑樂日記に出てゐる煙筒、筆、は共に安立町の名產である。

○軒に瓢箪つらせたりや――以下「何より以ておもしろい」までは、歌。紙鳶（イカノボリ）に「瓢箪節（ブシ）」として此の原歌が次のやうに出てゐる。

「餘りさびしさに垣に瓢箪つらせたをりしも風が吹いて、あなたのかたへからころひよ、こなたのかたへからころひよ、からころからころ瓢箪のつらせたは、いよこの、まことになによりもつて面白い。越後ざらしに……」

「軒に夕顔の」と言つた緣で、「軒に瓢箪」といふ歌を置いたわけである。

○岸の姫松――住吉の名所。住吉街道の東に在る。文意は、面白い岸の姫松、であつて「面白い」の語は、上を受け又下を修飾するわけである。

○ほの見えて――岸の姫松の僅かに見え來つたのと、ほのかに姿を見たばかりにて未だ情交のないのとの兩意をかねてゐる。

○逢はぬ昔と逢ひみてのちと――逢はぬ昔と逢ひみてのちと、いづれおもひは如何ならむ（當世小歌撫「新投節」）

○思ふ思ひは思ふより思ひの外の思ひなり――逢ひみてのちの戀心と逢はぬ迄の戀心とは、逢ひみてのちの方が豫想以上に切實である、といふ意味である。頭韻を踏んで修辭をこらしてゐる。

○四つ時分――今の午前十時頃。

○見晴らかし――見はるかしに同じ。

○鵜桿鳥――鵜に口を噤みの意が籠められてゐる。

○色鳥――秋わたる色々の小鳥

○さしあひなしに――互に差し障りになることもなく。誰れ憚りもなげな樣子を言つたのである。

○羽ぶすま――仲よく羽うちかはした姿を衾にたとへたので

ある。

○鳥の中にも比翼の鳥――「鳥の中にも比翼の鳥はおのればかりがつまもちがほに、鴛鴦の衾やかづらの床もさびしかるらんかも舟の……」（落葉集卷五「芦辺女踊」）の文句をとつてゐる。此處のところは、秋の渡り鳥の影をお初の眺めすてて道を急ぐ心を言つてゐるのであるが、お初が戀故の道行だから、何かと夫婦關係に緣ある文句を挿入して文章の綾としてゐるのである。文意だけとしてはこの歌の一節は無くても通じる。鵜桎鳥色鳥と言つて來たから、鳥の聯想でこの歌を出し、そのはづみで、あとを續けたのであらう。

○風情――樣子。

○あつとり――雀科に屬する渡り鳥、大きさ雀に似て群をなして飛來しその聲が喧しい。ここでは、濃情の鳥やといふ意を籠めて言つたものかと思ふ。

○すみよし――暫しの間も住みよいと地名の住吉とを言ひかけにしてゐる。

○相生に――例の謠曲高砂に「高砂住の江の松に相生の名あり」とあるに因んだのである。元は、古今集序「高砂住の江の松も相生のやうに覺え」とあるのから出てゐる。

○かたそぎ――神社の社殿の千木の先端の一角を削いだものをいふ。さういふかたそぎの千木をおいた社殿の造りを片そぎづくりの社といふ。住吉神社にかたそぎと呼ぶは當時の常識だつたものと見え、西鶴の附句などにも、住吉に「かたそぎ」を附けたものが見出される。新古今集神祇歌に、住吉明神の歌とて、

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行合のまより霜やおくらむ

といふ歌が載せられてゐる。住吉にかたそぎを結びつける觀念は、此の歌などから胚胎したものであらうか。本文で、「かたそぎの石の鳥居」とあるは、なほ住吉の石の鳥居と言はむぐらゐの內容である。「堅き誓ひや」を受けて頭韻をふんでゐる。

○水茶屋――專ら茶菓休息のための茶見世である。料理や或は遊女を侍らせる茶屋と區別するために特にから呼んだ。住吉の鳥居前から街道傍にかけて掛茶屋が並んでゐたのである。

○端居――なほ、端といふのと同じ。

○休らび給ひける。――お初が一休みしたのである。今までの文中、お初の動作に對して敬語を使はず、ここで敬語法を用ゐてゐるのは甚だ唐突の感をいだかせるが、これは古淨瑠璃時代の名殘りである。

（評　解）

此の一段は、女主人公お初の住吉參詣の道行文である。一躰、淨瑠璃曲に於て冒頭に道行文をおくことは先づ時代

物にないことであつて、純世話浮瑠璃には屢見られる脚色であるが、その濫觴は、本曲や近松の曾根崎心中に求めることが出來る。曾根崎心中よりも本曲の方が上場年代が古いと外題年鑑などから論じる説もあるが、本曲の方が曾根崎より後の上場なることは操年代記の記事並に本曲文中の文句等によつて立證せられ得るところで、名著全集本浮瑠璃名作集上卷に於ける黒木勘藏氏の解説が、先づ妥當だと考へる。本曲が曾根崎心中よりのちの製作であるとすると、本曲冒頭に此の道行をおいた脚色法も曾根崎心中に影響せられたものなりと斷ぜざるを得ない。曲中、おはつをして、「そちの内でも表でも曾根崎の心中は、南へ移つて來さうな事、とかくお初ぢや〳〵とあて事いふも病になる」と語らしめてゐる本曲の作者は、曾根崎心中が好評を得た事を念頭に於て、本曲を作りあげたことは明かである。從つて曾根崎心中から色々な影響を受けたものだらうと思ふ。此の道行の文中にも、

「はつと裳裾の裏見せて所躰訝し、抱へる帶をしなほしつ」

「たはれ胡蝶のとびつれて、上りつおりつ」

「扇かざして見晴らかし、ああよい景とほほゑみて」

「西は海原渺々と遠き山々きやうとくも」

といふ條りなどは、曾根崎心中の

「あちへとびつれ、こちへとびつれ……肩に止まればをのづから紋に揚羽の蝶」「のぼりつおりつ、谷町筋を」「西に舟路の海深く波の淡路に消えずも通ふ沖のしほ風身にしむ鷗、汝も無常の煙にむせぶ色にこがれ死なふなら、しんぞ此の身はなり次第、さてげによい景傳寺」「歩みならはず行きならはねば所躰くづをれアアはづかしの漏りて裳裾が

はらはら〳〵はつとかへるを打搔合せ弛みし帶を引締め」

などといふ文句に、倣つたとはいへないまでも、甚だ類似したもののあるのを感じるのである。

道行文だから、地景の推移に主人公の心持を絢ひまぜて七五調のカクテルを作つてゐるのは當然であるが、その文はリズミカルな點で、近松の觀音廻りにはるかに及ばず、懸詞緣語の使ひ方が、近松のやうに縱橫無碍の妙味を發揮してゐない憾がある。且つ、流行歌を取り入れてゐるが、歌と地の文との緊密性が甚だ稀薄であるが故に、その効果が充分あがつてゐない。そこで、われわれは、近松の文からは極めて動的な感じを感じるが、これは寧ろ靜的な感じを與へるといふことになるのである。才藻の相違である。

繰返していふが、此の一段は道行である。諸君は、ここに、譬へば、忠臣藏の八段目旅路の嫁入の場面のやうな、美しい人形振りの舞臺面を想ひ描いて戴きたい。繪のやうな色彩的な舞臺と艶つぽい太夫の聲と、そして華やかな合の手との渾然たる夢幻的な陶醉境をである。此の一段は、さういふ夢幻的な陶醉境をねらつてゐるのである。合の手は勿論、太夫の語り方も今は再現することは出來ないけれども、右手に眠るが如き岡を望み、左手に紺靑の海を隱見させる初秋晴嵐の松並木街道に、かの野崎村のお染に加賀笠を被せたやうな少女の媚かしい姿だけは眼前に想像することが出來る。ただ、詞章を通じてのかういふ陶醉感は曾根崎心中の觀音廻りにはるかに及ばないのを遺憾とする。